



聖ヨセフとわたし

聖ヨセフ年(今年12月8日まで)を記念し、霊名がヨセフの司牧者に聖ヨセフにちなんだものの紹介や個人的な気づきをシェアしていただく。

イエス、マリアと共に

私は二十歳で洗礼をうけました。霊名に「ヨセフ」を選んだのは、数多くの聖人の中で、ヨセフだけが神からいただいた特別な恵み——イエスとマリアと「家族」として生きた恵みにあこがれたからでした。

他の多くの聖人は、観想の中で霊的にイエスとマリアとの臨在を体験していたでしょう。また弟子たちは、イエスと共に生きた体験をしました。けれども「父」として「夫」として、イエスとマリアと共に生きることができたのはヨセフだけです。貧しくとも、イエスとマリアと共に寄り添い生きる幸せは、この世のどのような幸せもおよぶことのない、喜びと安らぎに満ちたものだったでしょう。生涯をイエス、マリアと共に生きて行きたいという願いをこめて「ヨセフ」を選びました。

ロザリオの祈りの喜びの神秘・第5の黙想「マリア、イエスを見出す」で私はいつも祈ります。「いくたび迷うことがあろうとも、人生の旅路の終わりににおいて、聖マリア、聖ヨセフに導かれてイエスのもとにたどり着く恵みを乞い願ひ奉る」。



林 和則神父 (垂水教会)



西山俊彦神父から その一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、西山俊彦神父様(小野原司祭の家)が担当。



『カカ・ムラドーナカムラのおじさん』(訳文・さだまさし他、双葉社、2020年、税込1650円)

「目あっても見ず、こころあっても悟らない」(ヨハネ12・40)との福音は、なぐさめでしょうか、いたわりでしょうか。いついつまでも、こころに刻みたい言葉です。

年明け早々『カカ・ムラド』を手にとつてそのみずみずしさに驚きました。アフガニスタンで刊行された絵本の日本語版(2冊合本)で、現地で活躍された中村哲医師のことが、絵と文字に託されています。

①ナカムラのおじさん は、おじいソラブから娘のシャブナムへの語りかけ。「お医者さんのカカ・ムラドがさ、聴診器で病気を治すことも大切だけど、水を

引けば病気もへらせるし、自分で大地を耕して食って行け、貧しさもなくなるよ、村人総出で、クナール河から水を引いたのさ。長い年月がかかり、それはそれは大変だったけど……」

②魔法の小箱は、カカ・ムラドからもらった小箱に入れる宝探しに出かける、幼い頃のソラブのファンタジー。

アフガニスタンと言え、戦禍にすぎず、干ばつ、貧困に悩む遠い国と思いがちですが、しかしその実、シルクロード文明(南路)に位置する日本より古い国、挿絵のあでやかさ、人情のこまやかさなど、恥ずかしながら驚いたのは私自身は無知でした。(中村哲先生は2019年12月4日、5人の仲間とともに凶弾に倒られました。享年73)。

『焼けあとのちかい』(文・半藤一利、絵・塚本やすし、大月書店、2019年、税込1650円)



「いざ戦争になると、人間が人間でなくなりまして。これまで「絶対」ということばは使ったことがなかったけれど、最後にいい遣したい。「戦争だけは絶対にはじめてはならない」。

「戦争は人間の仕業です」がホントなら、「平和も人間の仕業です」。

「あなた方の目は見、耳は聞いているから、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ13・16、5・9)。

次回は、村田 稔神父様(岸和田教会)です。

若者の読書感想文募集

- ① 年齢は35歳まで。カトリック信者、もしくはカトリック教会と何らかの関係がある方(カトリック校や諸施設の在籍者又は卒業生、保護者、関係者など)。
 - ② 感想は400字程度。氏名所属、顔写真(自由)を添えてメール(jho@osakacatholic.jp)か郵便にて送付(掲載にあたり編集する場合あり)。
 - ③ 感想を送ってくださった方全員に教区オリジナルしおり(4枚組)を進呈。
- たくさんのご投稿をお待ちしています。



「信仰の時間」

ABC ラジオ(朝日放送) 毎週日曜日 5:50~6:00AM

2月担当: Sr 深瀬 聖子

イエスの活動と祈り

(7日放送分より)



私たちは時の流れの中で人生を送っています。神様は、私たちを時間という限りのある中に置かれます。一人ひとりに与えられた時間は同じ長さではありません。私には私だけに与えられた時の長さがあるのです。その時間をどう使うのかは、私たちに任されています。そしてこの、時の使い方はとても個性的です。イエスは神でありながら、この時間の中に身を置かれました。私たちと同じように一日24時間を過ごし、一週間、一か月、一年を生きられました。イエスが良い便りを人びとに宣教し始めてからは、とても早く時間が過ぎていくように思います。なぜなら、イエスは忙しかったのです。弟子の姑が熱を出して寝ていると、

そばに行き、手を取って起こし、熱を去らせてくださいました。夕方になると、多くの病人が町の人びとに連れられてイエスのもとにやってきます。大勢の人をイエスは癒してくださいました。きっと夜遅くまで癒しの業を続けられたことでしょう。朝早くまだ暗いうちにイエスは起きて、人里離れたところで祈ります。つかの間の祈りのひと時です。なぜなら弟子たちがイエスを見つけ、宣教へと追い立ててしまうからです。ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出されたら、マルコによる福音書には記されています。自分のためではなく、神からの使命と人びとのために時間を使うイエスの姿が表われています。

私たちは、自分のために時間を使うことに慣れていません。そして当たり前のように使います。神様が私をこの時間の中に置かれた意味を深く考えようとはしません。けれども神様側には、私の生き方への望みがきっとあるのだと思います。時に流される自分にいったんブレーキをかけて、神様が私に望んでおられることに心を向けることは必要なのではないのでしょうか。イエスは朝早くまだ暗いうちに起きて一人祈られたと書かれています。私たちはどうでしょう。ある人は、昼のふとした仕事の合間にその時間を見つかるかもしれません。またある人は、夜、休む前にその日一日を思い起こし、静かな時をもつかもしれません。日常の忙しさにあっても、一日のどこかで心を神様に向ける時を持つことは大切です。私たちといつともにいたい願う神様を、一日のどこかで意識するのです。実は、神様は時の流れのあらゆるところで私を守り、助け、導いてくださっていたのだということを一日の出来事の中に発見することができれば、もうそ

れは祈りの始まりでしょう。そこから感謝が始まり、お願いが始まり、自分のことだけでなく、今日出会った人びとのことについても感謝したりお願いしたりするようになります。自分という、囲いを少し開いて、他者へ目を向け他者のために祈るようになります。私の力ではなく、神様がそのようにわたしの心を他者に向けさせてくださるのです。きっとそこには新しい関わりやつながりが神様によって作られていくのでしょうか。私に与えられた時間。二度と戻っては来ない時間。そしていつも新しい時間。心を神様に向けるひとときを、私に与えられた時間の中にも作ってみてはいかがでしょうか。祈りの体験をとおして、私にとっての当たり前が実はありがたいいただき物であったり、私にとっての判断や決定が違っていることに気づかされたりするものです。祈りという神様と私だけのひとときを生活の一部として取り入れてみませんか。 今月、特に新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈りをおささげします。